

# 綺麗 うつくし きよし

— 漢語と和語 —

浅野敏彦

## 一

古くは『言海』の「採集語類別表」に、新しくは『現代雑誌九十種の用語用字』の第三分冊所載の図①に示されている如く、国語語彙の中に占める漢語語彙の割合の大きさは、周知の事柄となつてゐる。

ところで、こうした漢語についての研究の歴史を通観してみるに、おおよそ次のような問題点を指摘しうるかと思つた。

一つは、山田孝雄氏の『国語の中に於ける漢語の研究』を越える方法論の問題である。これには、池上楨造先生の御指摘にあるように、問題とする漢語が、知的階層の用いる語なのか、庶民も用いている語であるのか、あるいは男子のみでなく女子も用いる語であるかどうか、といった「ことばの層」の問題を抜きにすることはで

きないであろう。また、漢語を共時論的語彙論における一種の語彙範疇として捉えていく、浜田敦氏の論<sup>②</sup>なども考えていくことが必要であろうと思われる。また一つには、語彙論一般についても言えることなのであるが、漢語を語彙の中の語として捉えていく研究が少ない、ということである。従来なされている多くの語史研究は、漢語が日本語化して行く過程を考えるには欠くことのできない研究ではあるが、和語をも含めた国語語彙という「単語の集まり」の中で捉えていかなければ、その漢語を十分明らかにすることはできないのではないかと思われる。漢語が外来語である限り、和語と無関係ではありえないであろうと考えられ、漢語にのみ焦点をあてているのでは不十分なのである。また、各時代の代表的な文学作品を資料として、時代を下るにつれて各々の文献に占める漢語の割合が増大していくことを指摘したのみでは「漢語の日本語化」を言ったこ

とはならないのも、同様の理由から言い得るであろう。

本稿は、漢語研究の歴史を通観したところから導き出された以上二つの問題点を踏まえて、日本語の歴史における漢語と和語との問題を考えて行こうとするものである。そして、具体的には、「綺麗」「うつくし」「きよし」の三語を対象とし、「美しさを表わす語彙」の中で、漢語と和語が国語史の上でどのように相互に関係していたのかを考察して行こうとするのであるが、この点について、少し説明を加えておくことにする。

まず、**状言**——鈴木胤の文法論からすれば形状の詞、国立国語研究所編『分類語彙表』で言えは相の類に属する語——を選んだ理由について述べる。漢語のような外来語は、その多くが外国から移入される新しい文物とともに入ってくる場合が多い。そして、それらの多くは体言として国語語彙の中にその位置を占めるのであるが、こうした事実をさして、漢語の増大とは言えないであろう。この場合は、事柄の世界の変動によって、語が一つ増えたにすぎないのである。即ち、国語語彙における各語相互間に何らの変動も生じていないのである。体言には、このように、言語の問題ではなく、レファラントの問題であることが少なくはないと思われるので、体言を対象とはせず、そうした恐れのない状言を選んだ。次に、「美しさを表わす語彙」というように、まず概念体係の枠を決めたこと

綺麗 うつくし きよし

については問題もあろうかと思われるが、膨大な語彙をつきくずしていく一つの方法ではないかと考え、このような方法をとった。

## 二

本節では、現代語で「美しさを表わす語彙」の代表語ともなっている漢語「綺麗」の語史をまず明らかにし、その漢語「綺麗」と和語「うつくし」「きよし」との関係を考察して、室町時代の後半、十六世紀に、漢語「綺麗」が和語「きよし」の意味領域に入りこんだことを述べるつもりである。

## 一

「綺麗」は、言うまでもなく中国に源流を持つ漢語で、『佩文韻府』に引用されている例には次の如き例が見える。

性奢豪務在華侈帷帳車服窮極綺麗厨膳滋味過于王者。(晉書何曾伝)

諸橋轍次氏は、「うるはしい、美しくはでやか」の意味であるとされている<sup>⑤</sup>。こうした「綺麗」が、我が国に入ってきた時期、経路については明らかにし得ないが、『文選』に「綺麗」が見えているところからすれば、奈良、平安時代には知的階層の理解語となっていたと考えてもよいようである。しかし、奈良、平安時代の日本側の

文献にはその使用例を見出すことができないし、『色葉字類抄』にも見えないところから推せば、平安時代には、一般的な使用語にはまだなっていないから推して、平安時代には、一般的に許されるかと思う。

右に述べた如く、奈良時代、平安時代の文献に「綺麗」は見えず、今までに捜し得た中で最も古い例は、鎌倉時代の終わりに成立した道元の『正法眼蔵』にみえる二例である。『正法眼蔵』には、

この糞掃衣をもちあることは、いたづらに幣衣にやつれたらんがためと学するは至愚なるべし。莊嚴<sup>ウツクシ</sup>綺麗ならんがために、仏道に用著しきたれるところ也。(第二十二 伝衣)

のように用いられ、文脈上「莊嚴奇麗」は、「やつれたらん」と対応していると解することができる。「綺麗」は、「美しく、はややか」の意味で用いられていると考えられる。なお、『学道用心集』にもみえている。

鎌倉時代の文献に見出し得た「綺麗」は、道元の著作にみえる三例のみである。この事実は、調査文献が少なかった結果生じたことでは必ずしもないようである。この時期に盛んに作られた、『宇治拾遺物語』をはじめとする説話集や、『平家物語』などの軍記ものなどにみえないところから推して、「綺麗」はこの時代にはまだ十分一般化していなかったと考えられはしないであろうか。また、道

元の使用語彙の一つになってはいるものの、それが用いられている文献は教義書であり、文体も漢文訓読体や漢文そのものであったりして、かなり固い文献であることなどから考えて、鎌倉時代の「綺麗」は、仏典、漢籍などに精通していた一部の知的階層の理解語にとどまっていたと言えそうである。

室町時代に入ると、鎌倉時代とは異なり、多くの用例を得ることが出来る。例をあげれば次のようなものである。

朱楼紫殿玉欄干、金ヲ鑑ニシ銀ヲ柱トセリ。其ノ莊觀奇麗、未曾テ目ニモ不<sup>レ</sup>見耳ニモ聞ザリシ所也。(大平記 卷一五)

天下服——廉ナモノチャカナニトシテカ著テ綺麗ナルラウト怪ソ。(漢書列伝竺桃抄)

これらの「綺麗」は、建物や衣服の「きらびやかな美しさ」を形容するのに用いられたものである。その他、『論語抄』、『尺素往来』にも同様の例がみられる。右に示した文献は、すべて十五世紀頃までに成立したものであり、この頃の「綺麗」は「きらびやかな美しさ」の意味で用いられていたといえるようである。ところが、十六世紀の初めの成立である『毛詩抄』、『中華若木詩抄』にみえる「綺麗」は、『太平記』などにみえる「綺麗」とは語義を異にし、「よれていない、清潔な」の意味で用いられていると考えられる。

澡ハ沐浴ノ心ゾ。キレイニイサギヨウアラハウト云心ゾ。(毛

詩抄 卷(一)

淵明カ足ヲアラハ・・・結句足ハ・ヨグルヘシ。何ト洗トモ・

クレイニハ・ナルマイソ。(中華若木詩抄 上巻)

こうした意味の「綺麗」は、『サントスの御作業』、ロドリゲスの『日本大文典』、『捷解新語』などの外国資料にもみえ、『日葡辞書』は、〈Saguiyoto〉と云つてゐる。

『太平記』、『論語抄』等の「綺麗」と、『毛詩抄』、『中華若木詩抄』等の「綺麗」とをつき合わすと、一五世紀末から十六世紀の初め頃を境として、もちろん、その間に明確な一線を画することはできないが、「綺麗」は、「きらびやかな美しさ」から「よごれていない、清潔な」へと意味変化を起したと見做すことができるかと思う。次に示す狂言「ほうちゅうむこ」の虎明本と虎寛本との詞章の異同は、このことを象徴的に物語っているものと言えはしないであろうか。

いやそちは一段ときれひながどちへゆくぞ。(虎明本)

扱そなた殊の外きらびやかながどれへ行ぞ。(虎寛本)

次に、室町時代の「綺麗」の語性について考えて行くことにする。『尺素往来』は、漢字文であるにしても、鎌倉時代の道元の『学道用心集』に比べると、往来物でもあり少しは軟らかい文獻であるので、「綺麗」を用いる階層も鎌倉時代のように狭くはなかつ

綺麗 うつくし きよし

たと考えられる。しかし、『太平記』では、漢文訓読体の性格が強い文体に用いられていることや、〈壮観奇麗〉と語尾を活用させずに体言として用いていることなどからすれば、室町時代前半では、依然文章語的性格の強い語であったと言えそうである。これに反して、室町時代後半の十六世紀以降になると、この頃日本に来ていた朝鮮人によって、彼らの日本語学習のために書かれた会話体からなる『捷解新語』や、ドミニコ会宣教師のコリヤードによって書かれた告白体からなる『懺悔録』などにもみられ、口頭語であったろうと思われる。なかでも、『懺悔録』の例は、〈dai. se〉というように、接尾語「ざ」をとっているが、この事実も、「綺麗」が早くに口頭語化し、深く日本語化していることを示すものである<sup>⑩</sup>。また、こうした口頭語化に比例して、使用層・理解層が男性のみでなく女性にも広がっていたことも、右に示した『懺悔録』の例が傾城の告白であるところより言えるかと思う。

上述したように、室町時代の後半、十六世紀に入って、漢語「綺麗」はようやくそれまでの文章語的性格の語から、口頭語的性格を強く持つ語となっていくが、それとあいまって、意味も「きらびやかな美しさ」から、本来の字義とは異なる「よごれていない、清潔な」へと変化していったようである<sup>⑪</sup>。

江戸時代の「綺麗」については、宝暦頃(一七五〇年代)を境と

して前期、後期に分ち、上方語（京阪語）の場合を考えていこうとしたが、資料の制約上、従来の国語史の多くがそうであるように、前期は上方語、後期は江戸語を対象とせざるを得なかった。それ故、記述としては不十分であり、平面的であることをまぬがれない。この点については、次節でいくらか補いたいと考えている。

寛永二年（一六二五）刊行の『尤の草紙』の「きれいなる物の品々」に掲げられている、〈路地に水うちたる〉、〈あたらしきたたみ〉、〈若衆のはの白き〉などから帰納すれば、「清潔な感じ」のするものや「すがすがしい感じ」のするものなどが、「きれいなる物」とされているようである。また、「可なりあざやかに近世語の姿がうかがへる」とされている元禄の頃も、

むかひ通るすげ笠足元腰元身のまはり、すつきりきれいなにはいたやうなは伯耆の国の人と見た。（丹波与作待夜の小室節）

の如く用いられており、「よごれていない、清潔」の意味で使われている。その他、『聖遊廓』にも同様の意味で用いられている例がみえ、江戸前期の「綺麗」は、十六世紀以降の「綺麗」と連続している。なお、江戸前期の「綺麗」の意味を右のように解することにについては、一七一〇年代に、朝鮮の訳官洪舜明の編纂した『倭語類解』が、漢字〈浄〉を〈きれい〉としていることが傍証となろうかと思つ。

ところで、『身体山吹色』（一七九八年）の例には、

あれも近江屋から出るお三井といふやつじゃ何んと奇麗じやなサ憎うないものじや。（巻之二）

と用いられているのがあり、『通言総離』（一七八七年）にも遊女の容貌について用いた例がみえることなどから考えると、一八世紀末の「綺麗」は、必ずしも「よごれていない、清潔」の意味だけではないようである。というものの、このような意味での用法は限られていたようであり、<sup>④</sup>一般的には、この頃も「清潔」の意味で用いていたようで、『雑字類篇』（一七八六年）は、〈キレイナナガレ〉、〈キレイズキ〉、〈キレイナ〉に各々、〈清流〉、〈潔疾〉、〈清楚〉を宛てている。

しかし、十九世紀の中頃になると、だいぶ様相が異なってくる。

『詩楚階梯』（一八四四年）には、

玉玲瓏 ユキナドノキレイナミタテ

のように、前期の意味と同じ「綺麗」の他に、

五彩ノ虹キレイナ虹

飄<sup>ス</sup>錦楓<sup>ヲ</sup>キレイナモミチガカチル

の如く、「あざやかな美しさ」の意味の「綺麗」もみえている。つまり、『詩楚階梯』の「綺麗」は、現代語のそれと同じく、「美」と「清潔」の二つの意味をもっていた。そして、この書が〈唯童蒙

ノ為ニ、《鄙俚野俗ヲイトハズ》(凡例)書かれたものであるところより、この二つの意味は、ともに口頭語におけるものであったと考えてよいであろう。また、「十九世紀の前半期の書写と見て大過ないものと思われる」とされている<sup>⑤</sup>、京都大学文学部言語学研究室蔵本の『交隣須知』にも次の如き例がみえる。

ランハ アマリキレイニハナケレトモニタイガヨフコサル

すなわち、江戸時代の「綺麗」は、十九世紀の中頃に、口頭語に於いて、それまでの「清潔」の意味の他に、十五世紀頃までの「綺麗」が持っていた、また近世の文語文献にみえる「綺麗」の持っている「美」の意味をも持つようになったのである<sup>⑥</sup>。

ところで、この時代の「綺麗」は、まったく口頭語化してしまっていたと言える。近松は、宿屋の女中が客を引く時のことばの中に「綺麗」を使わせており、三馬も、女性の風呂場での世間話の中に使わせていることから推しても、この時期の「綺麗」が日常のごく普通の話しことばであったことは明らかである。また、右で述べた口頭語化していたということと重なるが、すでに、漢語であるという意識はほとんどなくなってしまっていたとも考えられる。前述した「雑字類篇」に、

浄キレイ水ケイ 清キレイ水・<sup>⑦</sup>泉

の如くみえているが、この書が日常の口頭語から漢字表記を引いた

綺麗 うつくし きよし

めのものである(凡例)ことを考えると、《キレイ》は、日常の口頭語であったと言え、さらに、その漢字表記が漢語の「綺麗」ではなく、「浄」「清」であることは、この《キレイ》に漢語「綺麗」は関与していないことを物語っている。加えて、雅語を俗語で解釈した『雅語譯解』に、《キレイ》と表記して雅語「きよら」の訳にあてていることや、この時代の文献に仮名書きの例が多くみえることなども、「綺麗」に対する漢語としての意識が薄れていたことを示す一つの事実とみることができよう。

## (二)

本項では、前項で明らかにした語史を持つ「綺麗」と、これと関係の深い「うつくし」「きよし」との相互の交渉をみていくことにする。

「うつくし」の語史の大略は、

肉親の愛から小さい者への愛に、そして小さいものへの美への愛に、さらに室町時代になってから、ようやく美そのものを表わすようにと、移り変って来た。

とまとめられた大野晋氏の言葉で尽きているかと思われる<sup>⑧</sup>。いま、若干の補足を加えるならば、鎌倉時代中頃の成立とみられている『健寿御前日記』の次の例からすれば、鎌倉時代中頃には、「うつく

くし」は美そのものを表わすようになっていたと考えられる。

この盤は、ちりもなくうつくしうさぶらひけり。

「きよし」は「清潔」の意味で、口頭語、文章語を問わなければ、奈良時代より現代まで使われており、『時代別国語大辞典——上代篇——』が言う、感覚的な意味にも倫理的な意味にも使われていた、<sup>⑩</sup>というのは奈良時代に限ったものではなかった。

「うつくし」「きよし」の語史の大略は右に述べたようなことであるうと思われるが、この二語と「綺麗」が交渉を持つようになる時期は、「綺麗」が口頭語として用いられるようになった十六世紀以降であるうと考えられる。

「うつくし」は、十六世紀にはすでに美一般を表わす語となり、おり、『日葡辞書』には、〈*Neoga viucauxi chia*〉とあるが、そのポルトガル訳からみて、「きよし」の持つ意味と通じあっている。しかしながら、この時期の「うつくし」は、

漢氏ハウツクシク文ヲ織ル程ニソノ氏ヲヤカテアヤト云々。

(日本書紀抄)

我ハ此美人ノウツクシイヲ悦デハナイゾ。(毛詩抄)

の如き「美」の意味で用いられているのが大勢であった。「きよし」は、『日葡辞書』には〈*limpa*〉とあり「清潔」の意味であったが、『中華若木詩抄』等を見ると、倫理的なもの、精神的なもの

に対して用いることが多いようである。一方、「綺麗」が「清潔」の意味で用いられていたことについては、すでに述べたとおりである。とすれば、十六世紀の「美しさ」という意味分野の中で、「うつくし」が「美」の意味領域を、「きよし」と「綺麗」が「清潔」という意味領域を各々荷担していたことになる。ここで注目すべき点は、「清潔」の意味領域を和語「きよし」と漢語「綺麗」とが各々荷担している点である。用例の比較を試みれば、「綺麗」の〈*Qireina midzude gozaru*〉(ロドリゲス日本大文典)は、八月ノ中カラ鑑ヲ以テ取タルキヨイ水ソノ(史記抄)の「きよし」と重なる。つまり、室町時代の後半になって、「清潔」の意味領域に漢語「綺麗」が入りこんだのである。

江戸時代に入ると、「きよし」は口頭語としての性格を失なっていたと思われる。水の清潔さを表現するような場合は、

ナニ湯ハ清水でおざりますから、奇麗でおざります。(東海道

中膝栗毛)

のように「綺麗」を用いるのが口頭語では普通になっており、「きよし」を用いることがあっても、それは、文章語的な、少しあらたまった場合であつたろうと思われる。「東海道中膝栗毛」にただ一例みえる「きよし」は、

京の着だをれの名は、益西陣の織元より出、染いろの花やぎた

るは、堀川の水に清く、

の如く地の文に用いられたものである。ところで、「綺麗」は、江戸時代の後半頃より「美」の意味をも持つようになり(一)参照)「うつくし」と併用される例がみえるようになる。

十六七のきれいな若衆、十三四な美しひ娘と二人連でゆく。

(千年艸)

しかし、前述した如く、この時期の「綺麗」が「美」の意味で用いられるには一定の制限があったが、江戸時代の終わりには「うつくし」とまったく重なる語となっていたようである。

Kireina hana a beautiful flower / Utsukushii hana a beautiful flower (和英語林集成 一八六七年版)

つまり、「綺麗」は、江戸時代後半頃から「うつくし」の負担する意味領域へ入りこむ兆をみせ、江戸時代末には、「うつくし」とともに、「美」を表わす意味領域を荷担するようになっていたのである。

ところで、今日の「綺麗」と「うつくしい」との関係は、口頭語と文章語という関係になっているかと思う。これは、話しことばを資料とした『談話語の実態』、雑誌を資料とした『現代雑誌九十種の用語用字』<sup>⑤</sup>という二つの統計調査の結果、宮地敦子氏の調査等の客観的な資料や自己の言語生活などによって言い得る。

綺麗 うつくし きよし

さて、今まで述べて来た三語の交渉の歴史を検証する意味も含めて、次に方言を資料として、三語の歴史を構築してみようと思つた。

資料には、国立国語研究所編『日本語地図』第一冊の「47へ虹がきれいだ」、「48きれいに(掃除する)」の二枚の言語地図を用いることにする。

まず、「47へ虹がきれいだ」についてみてみることにする。各地点ごとの細かな異同を考慮の外において大要を言えば、岩手、山形、宮城、佐渡ヶ島、富山、石川、岐阜、京都、奈良、和歌山、そして九州では、虹をみて「ああウツクシイ」と言い、沖縄を除くその他の所では「ああキレイダ」と言う。すなわち、「ああウツクシイ」という所が、日本列島(北海道、沖縄を除く)に非連続的分布をしているのである。いま、集落群「A—B—C」と並んでいて、それぞれの集落に、語a、bが「a—b—a」と分布している時、一時代前には「a—a—a」であったと推定する言語地理学で言う「周辺分布の原則」<sup>⑥</sup>を適用すると、地図上の分布の意味するところは、次のように考えられる。

すなわち、過去の時代には、日本列島(北海道、沖縄を除く)の全域で、虹をみて「ああウツクシイ」と言っていたのであるが、その後、新しい言い方である「ああキレイダ」が使われるようになり、「ああウツクシイ」にとって代わるようになって行ったの



であろうと解釈できるのである。ところで、右の解釈とは逆の、「ああキレイダ」の方が古いとする解釈も許されるようであるが、「ああキレイダ」と言う地方に文化の中心地である東京、大阪が含まれていて、「ああウツクシイ」と言う地方には、九州、佐渡ヶ島が含まれているところから推して、「ああウツクシイ」が古いとする解釈が妥当であろうと思われる。そして、「48きれいに(掃除する)」「も右と同様にして、座敷をそうじしたあと、「ああウツクシクになった」と言う方が、「ああキレイになった」よりも古いと解釈できるかと思われる。

一枚の言語地図から構築できた歴史は、「ウツクシイ」↓「キレイ」である。そして、これは文献から得た結果と抵触するものではない。

さらに、岩手、山形の一部では、虹の場合は「ウツクシイ」と言い、掃除の場合は「キレイ」と言って区別しているが、このことと、虹、掃除のいずれの場合も「ウツクシイ」から「キレイ」に変わったという解釈とを合わせ考えれば、「綺麗」は、掃除をしたあとで、「ああキレイになった」という表現の方にまず用いられたと言える。これは、(一)で述べた「綺麗」の語史の口頭語における意味変化の解釈を補強してくれるものであっても、矛盾するものではない。また、奈良、京都、和歌山が、「48きれいに(掃除する)」の場

合に「ウツクシイ」を用いる地域となっているのは、江戸時代の京阪地方における「うつくし(い)」の意味、用法が残存したものであろうことが『浪華聞書』等の例から推測できる。これは、「47へ虹がきれい」の場合に「ウツクシイ」を用いることについても同様に考えられると思われる。

右に述べたように、一枚の言語地図から得られた「うつくし」「綺麗」の歴史は、文献から得た結論と同じ歴史を示していることになり、この二つの結果から判断すれば、「綺麗」が、「うつくし」よりも新しい語であり、「清潔」の意味で口頭語として用いられ、後には「美」の意味をも持つようになり、それまで「美」の意味領域を占めていた「うつくし」にとって代わったと判断できる。

### 三

漢語と和語との問題を考える意図の下に、二で三語を選び実証的な考察を加えてきた。その結果、次に述べるような事実を明らかにすることができたが、以下、その事実とそれが示すところをまとめ、小論の結語としたい。

(一)、奈良時代より使用されていた「うつくし」は、意味を変えながらも現代まで生きつづけており、特に、室町、江戸時代には美しさ一般を表わす語であった。

これを要するに、和語の生命力の強さと見做すことはできないであろうか。国語語彙の中での漢語の占める割合の大きさについてはよく指摘され、統計調査もこれを裏づける数値を示していることなどから、我々も、和語は漢語に比べて力が弱いものであると考えがちであり、従来の研究も漢語の勢力の強さに焦点をあてた、漢語の側からの研究が大勢を占めている。しかし、この、漢語の国語語彙の中に占める割合が大きいということは、異なり語数から見た結果を言っているにすぎないと思われる。宮島達夫氏が古典文学作品の語彙について研究された「語彙の類似度」<sup>⑤</sup>の中の、「語種別統計表」によると、『源氏物語』の和語、漢語の異なり語数が全語彙に占める割合は、各々、八七・二%、八・八%であるが、延べ語数では、九五・六%、三・四%となっている。また、「方丈記」では、

異なり語数の全語彙に占める割合が、和語七八・〇%、漢語二〇・一%であるのに対し、延べ語数の全体に占める割合は、和語八八・五%、漢語一〇・六%である。このことは、一つ一つの漢語が同一作品の中で何回もくり返しては用いられないことを示している。しかも、これは同一作品中に限ったことではない。鎌倉時代の『消息詞』には、「優美」「華麗」「華美」などの美しさを表わす漢語が見えるが、これらの語は、往來物をも合めた当時の文献にしばしば出てくるとい語ではないのである。約言すれば、漢語の使用度数は

低く、異なり語数から見たほどの力を持っているものではないというのである。<sup>⑥</sup>

ところで、使用度数の低い語には、その属する意味分野の中で、中心的な意味領域を占めずに、表現に荷担する語が多いであろうことは想像できるのであり、右にあげた「優美」などの漢語もそのような性質の語であると言える。それに対して、和語は、「うつくし」のように、意味分野の中心となる意味領域を占める語が多かったのではないかと思われる。

(一)、漢語「綺麗」は、和語の荷担していた意味領域に入りこみ、同義の和語を駆逐していった。

漢語は時代を下るにつれて増加するといった単なる量的な捉え方ではなく、漢語が国語語彙の中に入りこんでくる過程を和語との対立の中で捉え得たのではないかと思う。一般的に言って、外国語が国語語彙の中に入りこんでくる場合、国語語彙の中にそれと対応する語が存在しない時には、容易に入りこむことができるであろうが、国語語彙の中に対応する語がある場合は、そう容易に入りこむことはできない。たとえば、英語の“bell”は、「つりがね」まで含むほどの広い領域を持った語であったが、日本語の中へ取り入れられたのは、“door-bell”という限られた意味としてであった。<sup>⑦</sup>これは、国語語彙の中に英語の“bell”に相当する「かね」「りん」

「すず」があったからに他ならない。このように、国語語彙の中に対応する語がある場合には、外来語と国語との間に何らかの緊張関係が生じるが、同一語彙係の中に二語以上がまったく同価値の語として共存することはないので、何れかが意味変化を起すか、異なる係に属するようになりたりする。

漢語「綺麗」は、室町時代の後期に、「きらびやかな美しさ」という中国での意味とはまったく異なる「清潔」の意味で口頭語の言語体系に入り、同義語の和語「きよし」を文章語へと追いやったのであった。漢語の問題を取りあげる場合には、このように、和語をも含めた国語語彙の中で捉えていくことが必要なのではないだろうか。また、そうしてこそ、漢語の日本語化、国語化という問題もより一層明らかにしうらと思われる。

(三)、わずか三語からの立論では軽率のそしりを免れないが、室町時代は、漢語と和語との歴史における一つの大きな折れ曲がりの時代であったと考えられはしないだろうか。

室町時代に諸文化の上で起った様々な状況の中で、漢語の使用層、理解層も前代までとは異なり、大幅に広がっていったであろうことは、推察してよいのではないかと考えられる。すでに、文法論からの立論により、この時代が古代語と近代語とを分かつ分岐点であることが指摘されているが、漢語と和語との語彙の歴史の上で

も、一つの大きなエポックであったのではないかと推測するのである。従来、鎌倉時代を漢語の国語語彙に占める割合が増大した時代とみるのが通例であった。もちろん、これを否定するものではないが、軍記もの、説話集等の文献にみえる漢語のどれ程が、文章語としてのみでなく、口頭語としての座標を占めていたかについては明らかにされていない。思うに、鎌倉時代は、多くの漢語が口頭語の座標を国語語彙の中にしめるようになる室町時代以降の時期への胎動期、と見る方が正鵠を得ているのではないだろうか。

註

① 「近代日本語と漢語語彙」(『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』その他。

② 「漢語」(国語国文32巻7号)

③ 昭和46年度春季国語学会大会「フォーラム・語彙の研究」に於ける大野晋氏の御発言

④ 「綺麗」について述べたものには、管見した限りでは、秋葉直樹氏「『きれい』ということは雑感」(『野州国文学』3号)があるが、目的とするところ、対象としている時代も違っている。

⑤ 『大漢和辞典』

⑥ 『国語の中に於ける漢語の研究』三六九頁



②② なお、へ文語の作文を書く便のためへに作られた『口語文語対照辞典』（大正元年刊）に、へきれいではないか」という口語は、普通文ではへ美しからずや」と書くことを示した例があることよりすれば、明治末から大正の頃には、「うつくしい」は「綺麗」に対応する文章語的なことばとなっていたようである。

②③ 質問文は次のようになっている。へ虹をみて「ああキレイダ（ヤ）」と言いますか。「ああウツクシイ」と言いますか。それとも別の言い方をしますか（47）。へ座敷をそうじしたあとで「ああキレイになった」と言いますか。「ああウツクシク（ウツクシユウ）になった」と言いますか。それとも別の言い方をしますか（48）

②④ 柴田武氏『言語地理学の方法』（筑摩書房）

②⑤ へうつくしい 綺麗なる也江戸でうつくしといわぬよこれぬ 事をもいふへ（浪華聞書）

へ掃除綺麗 一際うつくしきを綺麗といへりへ（世話千字文 教訓絵抄）

②⑥ 『国語学』82集

②⑦ 現代語についても同様のことが『現代雑誌九十種の用語用字』の中で指摘されている。

②⑧ 楳垣実氏『日本外来語の研究』

使用したテキストは次のとおりである（ただし、本文を引用した文献に限った）。

正法眼蔵（日本思想大系）、漢書列伝竺桃抄（尾道短期大学国文学研究室編による京都大学図書館本漢書抄の複製）、毛詩抄（校訂毛詩抄、岩波文庫、抄物資料集成）、中華若木詩抄（抄物大系）、日葡辞書（岩波書店刊行の複製）、虎明本狂言（古本能狂言集）、虎寛本狂言（岩波文庫）、懺悔録（風聞書房刊行の複製）、倭語類解（京都大学文学部国語学国文学研究室編の複製）、交隣須知（同上）、身体山吹色（洒落本大系）、雑字類篇（天明六年の刊記を持つ版本）、雅語譯解（文政四年春の刊記を持つ版本）、日本書紀抄（高羽五郎氏翻刻の古活字本日本書紀抄）、ロドリゲス日本大文典（土井忠生氏訳本）、史記抄（抄物資料集成）、千年艸（東洋文庫）、和英語林集成（北辰刊行の複製）、消息詞（日本教科書大系）、論語抄（成實堂叢書）、尺素往来（日本教科書大系）、蒙求抄（抄物資料集成）、浪華聞書（日本古典全集）、世話千字文教訓絵抄（文政九丙戌歳の刊記を持つ版本）、詩礎階梯（天保一五年原刻、明治十三年再版の奥書を持つ版本）、健寿御前日記（日本古典全書）

その他の文献は、すべて日本古典文学大系によった。

（四六・一一・二〇稿、四七・九・一〇補訂）